

## 理事長所信

理事長 保坂 憲彦

～心を一つに～

なぜJCに入っているのか、または活動しているのかと問われた時、みな思い思いの答えが出てくるだろう。私はこの思いに拘りたい。そこには素晴らしい出会いがあり、自己を見つめ直す機会があり、地域の役に立とうとする気概が溢れている。そんな世界に身を投じ、本気で語り合える仲間と真剣に地域の事を考えることが出来る。なんて素敵なことなのだろうと改めて思う。一見青臭いと引いてしまいそうなことも、地域のためや会社のため、家族の将来のために我々青年が使命感を持って平気で実行することに意義がある。遠慮はいらない、思いっきりJC運動に取り組もうではないか。もちろん人それぞれに出来る限りはあると思う。だが限りは尽くしたい。そしてその思いを互いに共有し合うことが出来れば、困難も乗り越える活力となるだろう。心を一つにすることだ。様々な境遇で様々な立場や環境の中、集う同士が心を一つに人生最善の仕事に臨むことこそ、JC活動において最高の醍醐味ではないか。

～節目に向けて～

1963年我たちに高田青年会議所が産声を上げた。翌年には直江津青年会議所が続く。そして高田直江津青年会議所が誕生したのが1965年の春である。それから半世紀の時を経て、来年で創立50周年を迎える。この間、連綿と紡がれてきた創始の精神を改めて感じることができる。その長きに渡り多くの先輩諸兄が創意工夫を重ね、上越の発展のためにご尽力されて来たお蔭で、いまの上越JCがあるのだ。本当に感謝の念でいっぱいである。私自身入会3年目にして40周年の実行メンバーとして深く関った経験から、周年に対する想いは強い。当時の私はJCの卒業と同じ不惑の年を上越JCを迎えることに情熱を注いだものだ。あの頃は10年先の50周年など遙か先の感覚でしかなかったのだが、それが目前に迫ろうとしている。この50年と言う節目を迎えるに当たり、様々な想いと期待を胸に前年である本年度は確りと準備に取り組みたい。

【次なる一歩へ】

40周年でまちづくり宣言書を掲げ、45周年でグランドデザインアクションプランを提唱した。この10年はさらに、まちに目を向け公益性を意識した事業展開が成されてきた。その中で示したのが、グランドデザインアクションプランにおける6つの方向性である。これは上越地域の様々な課題をカテゴリー毎にまとめ、行動する手掛かりを明示したものだ。北陸新幹線開通が目前となり上越地域の取り巻く環境も変わろうとしている中で、我々JCが担うべき役割をじっくりと練り上げ、先ずは本年度に50周年のコンセプトを

掲げる。そして、食・農、歴史・文化、経済、教育、自然環境、暮らしと6つのテーマから事業構築出来るよう、各委員会を持ち味を発揮し、一貫性のあるアクションイベントとして企画し、本年度に実行する。その取り組みにおいて、それぞれの観点で他団体の取り組みと連携し、発展性を持たせることで50周年の布石にしたい。これまでの重き歴史を受け止め、次なる一步を踏み出す喜びと感動を意欲に、節目の年を会員相互で、より一層気運高まる1年とするため、最高のシナリオを創出する。

### ～魅力あるJC～

青年会議所は世界に120を超える国と地域に国家青年会議所が存在し、日本JCは、その中心的役割を担って運動を展開している。そこでは恒久的な世界平和実現に向けて、国際社会に様々な形で貢献している。また、国内では全国各地に701LOMが存在し、4万名近いJAYCEEが活動している。そして各地のJCはそれぞれの地域のために存在し、地域社会特有の問題を青年の英知と勇気と情熱を持って「明るい豊かな社会」を理想に掲げ、活動している。上越JCもその一つだ。そして地域の未来に希望を持ち、理想実現のために仲間と切磋琢磨しながら自己を磨き成長させ、地域の役に立つことが青年会議所の存在価値だと思う。それは40歳までの限られた時間の中で、どれだけ経験と意識改革をし、卒業後も社会に貢献できる人間に成れるかと言い換えても良いだろう。それを継続することこそ、「学び舎」としての魅力であり、これからも魅力ある組織で在り続けるべきだと心から思う。そして私たち青年は責任世代と言われるように所属する会員の多くは子育てに直面している。もしくは家庭を築くのがまだの者も社会的立場で子どもたちや親子と接する機会は多いはずである。そうした我々が先ずは社会貢献する身近で絶好の機会が子どもを取り巻く社会全体の教育運動だと認識するべきである。

### 【我々はリーダーである】

上越JCに在籍する会員の多くは経営者もしくはそれに準ずる立場の者であり、企業の中枢を担っている責任者である。大小あるにせよ、企業を通じてリーダーとしての役割を常に担っている。家庭においても父親として、跡継ぎとして、または大黒柱としてリーダーそのものであると思う。そして地域社会においては我々JAYCEEがオピニオンリーダーとして存在したい。そのためにはメンバー各々が資質を高める気概を持つべきである。前述のように会員一人ひとりが成長し、リーダーとして社会で力を発揮してこそ、JCの存在意義を示すことが出来ると思う。ここは「学び舎」である。リーダーとしての心構えを備え、経営者としての資質を高め、社会に良い影響を与えることが出来るだけの人間性を磨くことがJCでは出来るのだ。メンバーはそのことを自覚し、頼られるリーダーとなる意欲を持ち、精進していかなければならない。さらに地域に役立つ活動として経営者の資質を向上させる育成事業を対外で実践し互いに経験を積み、それぞれの企業に活かすことが出来れば、より確実なものとなり、本物の「学び舎」となる。

### 【地域のたから】

戦後の日本の教育の在り方について各方面で議論されていることは周知の事実だと思う。日本は世界に誇る精神性を有し、道徳教育として受け継がれてきた。そして相手を慮る心「おもいやり」は今もなお生き続けている。しかし核家族化や近隣関係の疎遠化、戦後教育における個を尊重する教育などにより、道徳心に触れる機会が明らかに少なくなったと実感する。さらには道徳教育そのものが戦後の偏見で敬遠される風潮が蔓延してしまった。そうしたことが現在の利己主義が優先される要因となったと考えられる。だからこそ我々親の世代が多様化する現代社会において、道徳心の大切さを今一度考え直さなければならないのだ。12年前帰郷した私が率直に感じたのは都会の人とは違う人の温かさだった。声を掛けてもらう何気ない一言も優しさを感じた。今でこそ慣れてしまったが、これこそが我が地元の誇れる文化だと思う。そんな優しい人々が住まう上越だからこそ道徳教育の大切さをさらに浸透させ、まずは親である大人から率先垂範できるよう取り組み、子どもの模範になるべきだと考える。そして青少年事業を通じて、子どもへ想いを継承できれば、素直で「おもいやり」のある子どもが増え、和を重んじ礼儀正しい若者へと育つことにつながると思う。子どもは「地域のたから」なのだから、大人の我々が地域ぐるみで子どもを教育する責任がある。

### ～地域を想う～

いまでこそ、地域に対する想いを人前で話すことが出来るが、12年前の私は違っていた。田舎だから、人が好かないからなど様々な感情から地元を嫌い、高校が終わって当然の如く地元を離れ9年、再び地元に戻って来ても馴染みたくないと言う抵抗がどこかにあった。そんな時期にJ Cの存在を知ったのだ。その頃は合併前だったので三和出身の自分が上越（旧上越市）の者に負けたくないと言う田舎コンプレックスみたいな感情が入会の動機で、その意識の中には都会から見れば町も村もない、どこも田舎ではないかと反骨心に近いものがあった。あれから11年、平成の大合併で一つになった大上越市で地域に対して情熱を注ぐ多くの先輩や同士と出会い、数々の経験をさせて頂いたおかげで、地域に対する想いは以前のような偏見はもうない。この上越をこの地域を何とかしたいと愛情に近いものを感じるまでになった。そう、振り返れば5年前、日本J Cに出向した際に全国から集まった多くのメンバーと相対し地元を意識して話す機会が増え、蟠りのない地域を想う感情が高まったのだと思う。そして、その出向先で携わった国民主権確立運動を通して、自分たちのまちを俯瞰的に分析することを知り、まちづくりにおいては自分たちが積極的に関わり、政治(行政)と一体になって取り組まないと駄目だと実感したのだ。

### 【まちを元気に】

長らく続く不況下で地元経済を支える中小零細企業の殆どが疲弊している。巷で交わす言葉は嘆きばかりである。このままで本当に良いのか。手を拱いては何も始まらない。

我々は青年経済人である。経済が上向きに、まちが少しでも元気になる取り組みが求められている。夏の恒例行事として5年続けて来ている「オクトーバーフェスト」は、市のはすまつりに合わせて開催しているビール祭りであるが、本年度は経済活性の観点から参画企業と協働し、夏の地域経済を元気づける起爆剤となるイベントとしてさらに昇華させたい。さらには大合併した上越市の各地に様々な伝統的祭りが存在しているので、それらを繋ぐ仕掛を強力なものとし観光振興できれば、上越市全体でさらに盛り上がるができる。それぞれの地域に根差した歴史や文化、伝統や景観などを連携させ2014年に迫る高田開府400年に向けて地域ぐるみで取り組み、交流人口を増やす契機としたい。それを目指し、地元企業の雇用促進や上越の産業として絶大な農業をさらに振興させる対策を打ち出し、交流から定住へ人口増を見込み、経済成長へとつなげる。

### 【未来を切り拓く】

20万人強の人々が暮らす上越市において、いま何が問題なのか。国全体の問題でもある少子高齢化を始め、農山漁村部の過疎化や経済停滞による雇用問題、さらには北陸新幹線開通に伴う上越市特有の諸問題など厳しい財政状況の中、多くを抱えている。果たして、この問題意識を我々市民は共有できているだろうか。人任せにはしていないだろうか。国の主権者が国民であるならば、市の主権者は我々市民である。我々市民は市政にもっと目を向けるべきであり、まちの将来を考えるべきではないだろうか。まずは我々が率先して市政を的確に理解し、当事者意識を持たなければならない。その上で政策に関心を持ち、政治に自ら参加する機会が選挙であることを伝播させる取り組みとして、公開討論会や日本JCが推進する「e-みらせん」の運用を通して、政策を市民に分かりやすく届ける事業を実践し、まちの将来に責任を自覚して未来を切り拓く選択を選挙で出来るようにしたい。さらにはNPO活動との協働や各種ボランティア団体との連携などを活用させ、市民一体となって勉強する場や意見交換する場などの仕組を構築し、市政に参加する意識を醸成する。

### ～かけがえのない仲間～

JCは単年度制である。単年度制であるがゆえに様々な立場で活動ができ、多くの経験を事業を通じて得ることができる。そしてその事業を実行する過程ではメンバー同士の交流が不可欠である。一年一年と活動環境を進化させ、組織を変化させながら、二度とない時を選ばれた者同士で共有する。JCは不連続の連続と表現されることがあるが、委員会にしる、理事の役職にしる、同じ状況は二度とない千載一遇の機会である。その一年という、人生においての一瞬のような時を濃密に過ごすことで築かれる友情こそ、JCの真髄ではないだろうか。お互いを知り、認め合い、信頼し合わなければ、成し得ない状況に直面する機会が、かけがえのない仲間とさせてくれる。入会したからには、是非とも体感してもらいたい。そしてそれは一年目が最も重要だと思う。実際、私自身一年目に一緒に過

ごした仲間とは一体感を共有したことで信頼できる友達となり、今も発奮する原動力になっている。

### 【つなげる絆力】

ここぞという時の団結力は上越 J C の誇るべき伝統である。過去に遡れば、40 周年、全国城下町シンポジウム、45 周年など私が入会して 11 年間、LOM 全体の一大事業は団結力を大いに発揮して成功させて来た。しかし 45 周年から 4 年を経とうとする現在、その感覚が薄れてきてはいないだろうか。確かにそういった機会に恵まれていないので感じる事が難しいのかも知れない。体感したメンバーが少なくなってしまったのもある。しかし組織として一大事業に向けて爆発させる団結力を常に維持するのは難しいにしても、皆で共有できる一体感を創出したい。そこで本年度は、メンバー同士のつながりを念頭に会員相互の交流をさらに強化することに注力する。それには先ず最少単位の交流の場として、各委員会の気持ちを一つにすることが重要である。そこでの様々な事業を通じた共同作業や多くの集まる機会を最大限活用して欲しい。そして月一度、全会員が集う例会では、それぞれの想いを結集し、一体感を全体で感じる場にしたい。そのための工夫や仕掛けを企画、実行し例会と連動させることで、LOM の絆力（団結力）につなげ、活気ある組織とする。

### 【新たな風】

1 年目に何を感じ、何を思い、何に気づくかが大切である。上越 J C は新入会員制度として長きに亘り、オリエンテーション委員会を設置して来た。これも良き伝統の一つだと思う。この新入会員のみで構成される委員会で一年間、確りと学び、何でも吸収して欲しい。そして共に過ごす同じ委員会メンバーは唯一の同期であり、一生の付き合いが出来る仲間とすることが出来る。我々会員は須く経験してきたのだから、その経験を活かし確りと迎え入れ、最善の環境を整えてあげたい。そうした中で、各事業の参加や自ら実践に携わり地域に意識を向けることや将来に希望を持ち、仲間へのおもいやりを体感し、自立してくれることを期待する。1 年目は J C を存分に体感した中で自立し、2 年目に J C の要領を知り度量を大きくし、3 年目には組織の戦力として如何なく力を発揮する人財になることを念願する。1 年目の自立とは、己が何のために青年会議所に所属し何のために活動するのかを考え、明確な意思として持つことが出来ることだ。その為の修練を実施し、奉仕と友情の精神を育てて欲しい。新たな風は組織の活力源となる。

### 【3年後を見据え】

公益社団法人に移行し、2 年目を迎える。初年度は手探りの部分もあったが、財政面や事務手続きの面で大きな問題もなく終えることが出来た。上越 J C は公益社団法人として十分やっつけていける自信が付いたと思う。財政面の不安が無くなれば、さらに円滑な組織運

営につなげられる。ただし現状は心配なくても、1973年生れと1974年生れの所謂団塊ジュニア世代の38名が卒業する3年後以降は、財政面も然ることながら、人間力の面でも厳しい状況に陥ることが予測される。これは全国規模で深刻な問題となっており、会員減少に伴い、著しく組織力が低下していくことは明白である。よって今後2年間は特に会員拡大と人材育成が組織を維持していく上で最重要課題となる。また会員減少となれば資金減も余儀なくされる訳であり、昨年度同様に賛助会員制度の推進や充実した公益事業として認知され、補助金など外部資金を調達できる仕組みを強化していく必要がある。また業務上の簡素化も進め、人手が掛からない工夫も実施したい。安定している今だからこそ、先を見据えて基盤を整備し、無理のない運営が継続出来るようにしなければならない。

#### 【内に外に】

140名からなる会員が何事もなく活動できるのも、LOMの中核機関である事務局が順調に運営されているからである。事務方の業務全般は縁の下の力持ちと称されるように地味だが欠かせない存在であり、良し悪しで各委員会、各事業の成否に影響する割合は少なくない。よって事務局には安定感と信頼感が何処よりも求められる。そしてLOM内で盤石なネットワークを構築し、SNSなど様々なツールを用いて密な連携を図り、前述した一体感につなげ、仲間づくりに拍車を加えたい。また内部の情報を出来るだけ開示し、外部に発信し続けることにも注力して行く必要がある。LOMの情報やJC運動の露出度を高め、様々な方に様々な場面でJCに触れて頂く機会を創ることが肝要であり、情報提供できる事業を継続し、市民の皆様の関心を惹く話題を常に発信して行きたい。そうすることによって認知度を高め、会員拡大や運動の影響力向上につなげられるのだ。

#### ～いまに感謝～

それぞれの役割を担い、JC活動を邁進する上で考えなければならないのが、今に感謝することである。今こうして社会の一員として当たり前のように暮らす日々も、社会の歯車がうまく噛み合い、人々が協力し合っているからこそ実現する平穏だと実感している。さらに我々がJCに所属し、地域活動を行えるのも、様々な人々からの理解と協力があったからこそ成し得ているのだ。つまり活動の基盤である組織（JC）はメンバーの支えがあったからこそ成り立ち、一人ひとりの力とそれを取り巻く多くのご家族や企業など関係者の支援による恩恵があったこそだと思う。いま本当に、地域社会のなかで会員が結集しJC活動が出来ることに感謝しなければならない。

#### ～地・志・楽・礼～

結びに私自身のJCに対する信念を漢字4文字で表した。その最初の一字は活動の原点である「地」の字である。我々会員の殆どがこの地に生まれ、この地で育った。そして現在はこの地で生業を営んでいる。だからこそ地域を皆が愛する故郷にしたい、誇りを持てる

ようにしたいと想いを込めた。次の「志」は青年会議所と言う「人生の学び舎」で真の仲間と時には厳しくもあり、時には支え合いながら志を立て、何事からも学ぶ果敢な気持ちを込めた。次の「楽」は人とふれあう喜びと何事にも向き合う精神を養い、自己を成長させる有意義な機会を楽しんで欲しいと想いを込めた。最後の「礼」はメンバー各々が地域貢献する為の信念を持ち、心の型として宿し、「人生最善の仕事」である社会奉仕で精一杯に礼を尽くそうと想いを込めたのである。これを本年度の活動指針として会員の皆と共感し、共に歩んで行きたい。

地 この地に生まれ、この地で育った 我らが愛する故郷を誇りに  
志 仲間と厳しく志を立て、何事からも学ぶ 「人生の学び舎」で  
楽 人とふれ愛、仕事とむき愛、自己を高める 楽しい機会とし  
礼 心の型を宿して、社会への奉仕で礼を尽くせ「人生最善の仕事」